審査の結果の要旨

氏名　髙橋（越野）麻衣子

本論文は、音読と黙読での読解過程の共通点と相違点を、実験的な検討を通じて明らかにすることを試みたものである。

第 1 章では、音読後と黙読後の読解成績の違いについてこれまでの研究を概観している。そして、児童期には黙読よりも音読のほうが理解を促進し、成人になると音読後と黙読後の理解成績に差がなくなることが示されてきたものの、その認知的メカニズムについては十分実証的に検討されてこなかったことを指摘している。第 2 章では、調査研究によって、小学生の途中で音読より黙読のほうがわかりやすいと評定が逆転するが、成人になると音読と黙読のわかりやすさは同程度であると評定することをまず確認し、発達段階によって音読と黙読での読解過程がしだいに異なってくる可能性を示唆した。

第 3 章以降では、成人の読解過程に焦点を当てて、心理実験による研究を行っている。まず、第 3 章では読解時の眼球運動を測定し、黙読においては音読よりも読みの速度が速いだけでなく、停留や読み戻りを頻繁に行っていることを示した。このように成人の黙読には眼球を自由にコントロールして効率的な読みを達成できるという利点があることが考えられた。一方で、第 4 章では読解時に読み手の認知資源を奪うタッピングの課題を課して理解成績を検討したところ、音読時にはタッピングによる干渉効果は生起しないが、黙読の理解成績はタッピングによって低下することが示された。また、黙読時には干渉刺激によって読み手の認知資源を奪うと、音韻表象の生成と利用の過程が妨害されることも示唆された。以上から、黙読時には音韻表象を生成し利用するためにある程度の認知資源が必要だが、音読時には構音運動を強制的に行うことで音韻表象の生成と利用が可能であり、読み手の認知資源の多寡にかかわらず一定の読解成績に到達できる可能性が指摘された。

第 5 章では、音韻表象の生成と利用が日本語の文の理解過程においてどのような役割を担うのかを検討した。構音抑制法による実験の結果、文の音韻表象は名詞に後続する助詞の保持と処理を促し、統語的に複雑な OSV 文の理解を促進することが示された。そして第 6 章では、音読の活動に特有な構音運動と音声情報の役割を検討したところ、構音運動は文や文章の逐語的な記憶の保持を促進する一方で、音声情報は OSV 文の理解や修飾語の保持といった、語の概念結合を促す役割を持つことが明らかとなった。

以上を踏まえて、第 7 章では、音読と黙読で、視覚情報処理を経て音韻表象を生成し、命題表象を構築するまでの過程における共通点と相違点を論じている。また、読解の発達に即した音読の役割を検討し、児童の読み能力を効果的に育成する方法を提案している。

このように本論文は、音読と黙読の読解過程を精緻な実験を通して検討し、認知心理学における学術的貢献があるだけでなく、教育や発達の分野への大きな示唆をもたらす研究であるという点で、博士（教育学）の学位にふさわしい論文であると評価された。